

葛城・二上山水系にみる古代コスモロジーに関する研究 3

研究年度・期間：平成15年度

研究ディレクター：下休場千秋
(環境デザイン学科 助教授)

共同研究者：井関 和代 ハーヴィ・A シャピロ
(工芸学科 教授) (環境デザイン学科 教授)

研究助言者：嶋田 義仁
(名古屋大学 教授)

研究補助者：上羽 陽子
(芸術文化研究科 研究員)

研究経過の概要

本研究は、平成13年度より開始した「葛城・二上山水系にみる古代コスモロジーに関する研究」の最終年度における総括として位置づけられるものである。

本年度の研究目的は、過去2年間に灌漑、信仰、祭祀の側面から分析した葛城・二上山水系における古代稲作文化の特性に関する研究成果に基づき、「南河内の古代コスモロジー」の特徴を明らかにすることにあつた。

研究メンバーの専門分野は、民族芸術(井関、上羽)、宗教学(嶋田)、環境デザイン(シャピロ、下休場)と多岐にわたるため、各々の専門性を生かしてメンバーそれぞれが研究活動を行うと共に、数度の共同研究会も開催した。それらの主な内容は、以下の通りである。

- ・ 4月21日(月) 研究方針と研究分担、今後の研究会についての打ち合わせ(全員)。
- ・ 4月30日(水) 共同研究会の打ち合わせ(井関、下休場、上羽)。
- ・ 5月23日(金) 「河内の古代栽培植物」をテーマとした共同研究会開催。講師は野菜文化史研究センターの久保功氏(全員)。
- ・ 9月21日(日) 羽曳野市シンポジウム「河内飛鳥と武寧王」に出席(井関、下休場、上羽)。
- ・ 9月27日(土) 社叢学会研究会「東アジアにおける杜の信仰と持続」に出席(下休場)。
- ・ 10月11日(土) 日本地理学会において「日本における自然の文化的価値」をテーマに発表(シャピロ)。
- ・ 11月22日(土) 社叢学会研究会「焼畑民の山ノ神」に出席(下休場)。
- ・ 1月19日(月) 調査研究結果の情報交換(全員)。
- ・ 1月21日(水) 研究成果のまとめと今後の方針について検討(全員)。
- ・ 1月22日(日) 二上山博物館講演会「アジアの民族建築から古代日本を見る」に出席(下休場)。
- ・ 2月1日(日) 「アフリカ伝統王国研究会」に出席(嶋田、井関、下休場)。

以上のほかにも、研究メンバーは各々が必要に応じて、資料収集や現地調査等を実施した。これらの研究活動を通して得ることができた知見について、研究メンバーが共同研究会において相互に情報交換を行い、葛城・二上山水系における古代コスモロジーの特徴を明らかにすることに努めた。

研究成果について

「葛城・二上山水系にみる古代コスモロジー」を研究テーマとする本研究の目的は、石川流域における古代から現代に至る灌漑土木事業の痕跡、神社の祭神・祭礼や河川・灌漑用水路・溜め池に関連する造形物などを探ることにより、古代稲作文化の担い手であった当時の人びとの水を通した自然観はどのようなものであるかを理解することであった。さらには、現代に生きる我々がそれらの歴史遺産をどのように保全し活用してゆけば良いかを考察することも目指した。

そのために、まず南河内の水系、地形、土地利用について以下のような研究成果を明らかにした（図1 微地形区分図を参照）。

南河内地域を南から北へ流れる石川本流に対して、右岸は上流部から佐備川、千早川とその支流の水越川、梅川とその支流の太井川、飛鳥川の各流域に大まかに区分することができる。石川左岸は羽曳野丘陵と河岸段丘が広がり数多くの小河川が分布している。この羽曳野丘陵の西側の美原町から大阪狭山市一帯にかけての段丘は、古代より狭山池の築造による灌漑用水路が整備され、大規模な水田開発が行われた地域であり、東除川、西除川が北流している。南河内地域の地形を、「山地・丘陵地」、「台地・段丘」、「低地」の三つに大別してみると、山地・丘陵地から流れ出した石川右岸の各支流は、台地・段丘を経て低地へと流下している。明治以前のこの地域の主な土地利用は、山地・丘陵地が山林、台地・段丘と低地が水田と集落であった。日本の古代稲作文化の基本である水田開発とその前提としての農業用水の確保は、この地域に居住する豪族たちにとっての最重要課題であったため、大規模な土木技術をもたない古代において、山麓部の小河川を堰き止めることにより溜め池を造成したり、あるいは堰から取水し用水路に分水することにより、小河川の下流域に水田開発を進め、水を供給したと考えられる。

次に、前年度の研究成果として、古市古墳群と水系に関して明らかとなった諸点は以下の通りである。

この地域は古代には大阪湾の沿岸部に近い場所で、古くからヒトが居住するのに適した場所であったため、水田開発や古墳造成を行うだけの社会的基盤が早くから形成された地域であった。そのため、土木技術者、土器作り・鍛冶の工人集団が早くから定住し、さらには葛井寺、道明寺を始めとする多くの仏教寺院も建立された。

水系に関しては、5世紀を中心に形成された古市古墳群の中をぬうように、日本書紀に記述されている「古市大溝」と呼ばれる幅20メートル前後に及ぶ人工水路の痕跡が現在も残っている。また、この地域一帯に開発された水田へ上流からの水を配分する場所は、現在の羽曳野市水守地区の近くにある「カンコ田」と呼ばれる所であったが、現在では南阪奈道路の建設によってその姿が大きく変貌している。このように、都市化が進み土地利用は大きく変容しているが、蘇我氏と関係の深い敏達天皇を始めとする天皇陵が造成された太子町や、さらに上流部の河南町や千早赤坂村よりも古くから、水田や灌漑用水路の開発が行われた地域であることが分かった。

次に、葛城山から流下する水越川と建水分（たけみくまり）神社に関する考察結果を述べてみたい。

建水分神社は、通称「水分（すいぶん）神社」、「上水分宮（かみのみくまりのみや）」と呼ばれ、下流に位置する富田林市宮町の美具久留御魂神社の「下水分宮（しものみくまりのみや）」に対応する神社と位置づけられてきた。御祭神は中殿に天御中主神（あめのみなかつぬしのかみ・宇根根源の元始神）、左殿に天水分神（あめのみくまりのかみ・天の水を施し配分する神）などが祀られ、楠木正成の氏神でもある。即ち、「水の神」が祀られているのである。

古代の人びとが水の恵みを得たり、旱魃に悩まされたりすることによって抱いた自然の力に対する特別な感情が、「水の神」の信仰に繋がったとするならば、これと同様な「自然観」を、研究メンバーが調査をしているアフリカ、カメルーン共和国に居住する農耕民・ティカールの人びとの「水の精霊」信仰の中にも観察することができる。

建水分神社では毎年、10月第三土曜日に、神社の前の水越川から取水した用水を利用する三市町村の各氏子地区の20台以上の地車（だんじり）が宮入りする秋祭りが行われる。水の神を祀ると同時に、上流と下流の各集落間での水争いを防ぐためにも、水によって結ばれた各集落がこのような祭礼を今も繰り広げるのである。日本には古代より、盆地や山麓部の小河川の流域において、このような河川から取水した農業用水によって繋がった「水縁社会」が形成され、水の神を祀る神社の祭礼が行われてきたといえる。

河川が山地・丘陵地から台地・段丘や低地に流れ出る場所に鎮守の森（社叢）をもつ神社があり、その背景には水が絶えず流れ出る山地・丘陵地がある。そこには、神が降臨すると考えられている「神名備山（かんなびやま）」が鎮座している場合が多い。南河内地域でも、各地に「神山（しんざん、こうやま）」と呼ばれる山やまがある。日本では山は古来、死者の世界であり、祖霊がいる場所でもあった。その山から流れ出る水の恵みは、自然の恵みであると共に、祖霊の恵みでもあった。

このような事例は、二上山水系の太子町山田地区においても見出すことができる。

太子町の水系、地形、土地利用の特徴について考察した結果は次の通りである（図2 旧版地図 [明治44年発行] を参照）。

太子町・山田集落は太井川と飛鳥川の流域の境界である尾根筋に位置する集落である。山田

集落周辺の段丘上には現在も美しい景観の棚田が広がっている。これらの水田の水源となっている二上山に繋がる山地には、「神山(しんざん)」と呼ばれる神奈備山があり、太井川がその山地から段丘に流れ出る所には、「科長神社(しながじんじゃ)」が祀られている。

科長神社の祭神は、「息長宿禰命(おきながすくねのみこと)」と「葛城の高額姫命(たかめかひめのみこと)」の2神で、その子・息長帯姫命(おきながたらしひめのみこと)は、後の神功皇后である。また、風の神である「級長戸辺(しなとべ)大神」を祀り、元は二上山付近にあったと伝えられている。飛鳥川、太井川流域を中心とする太子町山田集落の五つの町会(後屋、永田、西、東条、大道)は、この科長神社の氏子集団であり、毎年7月の第三日曜に行われる夏祭りでは、これらの五つの町会の地車が宮入をする。前述した水越川水系の建水分神社と同様に、太井川と飛鳥川水系においても、流域を単位とする「水縁社会」が現存していることが明らかとなった。

さらに、この地域の特徴は山麓部や尾根筋の高台に、敏達、用明、推古、孝徳、聖徳太子の各御陵が造られており、その周辺に溜め池や水路が存在することである。古代におけるこの地域の水田開発は、これらの古墳の造成と同時に行われたのではないかという仮説を立てることができる。南河内に存在する多くの古墳が台地・段丘上に位置していることにより、その周辺部や下流部の水田開発を容易に行うことが可能になったと考えられる。

「コスモロジー」の語源は、自然の秩序と人間を含む地球環境の秩序を意味するコスモス(秩序)である。言い換えれば、人間が生きる際に心の拠り所となる世界観を意味する。河川の流域というエコロジカルな一つの空間単位は、古代からの日本人やアフリカ農耕民に共通する伝統的な宗教観である「祖先崇拜」、「山中他界観」、さらにはコスモロジー、自然観の基本でもあったといえる。

水越川流域の建水分神社と、太井川流域の科長神社は、共に地域の人びとにとって、水を媒介とする信仰の拠り所であることが、現在も毎年執り行われる祭礼からも理解することができた。南河内の現在の風景に、千数百年以上もさかのぼることができる用水路、溜め池、神社、祭祀などの人びとの興味深い生活文化の痕跡を見出せることに改めて驚かされると共に、その中に古代の人びとのコスモロジーを読み取ることができた。

研究の反省

民族芸術(井関、上羽)、宗教学(嶋田)、環境デザイン(シャピロ、下休場)と異なる専門分野の研究メンバーが参加する学際的な研究を進める上で、研究テーマや目的に関する各メンバーの共通認識を得ることの困難さがあった。

しかし、水系、地形、土地利用といった自然環境としてのエコロジカルな特性と、そこに生活する人びとの古代からの自然観や信仰に基づくコスモロジーとの関係を明らかにしようとする本研究のような学際的取り組みの必要性は高いと考えられるため、これからも機会があれば、エコロジーとコスモロジーの双方の視点に立つこのような学際的研究を行ってゆきたい。

また、本研究で対象とした貴重な数々の歴史遺産の保全と活用方策や、地域における将来の土地利用や環境デザインのあり方を検討する研究の必要性が高いといえるが、今後の課題としたい。

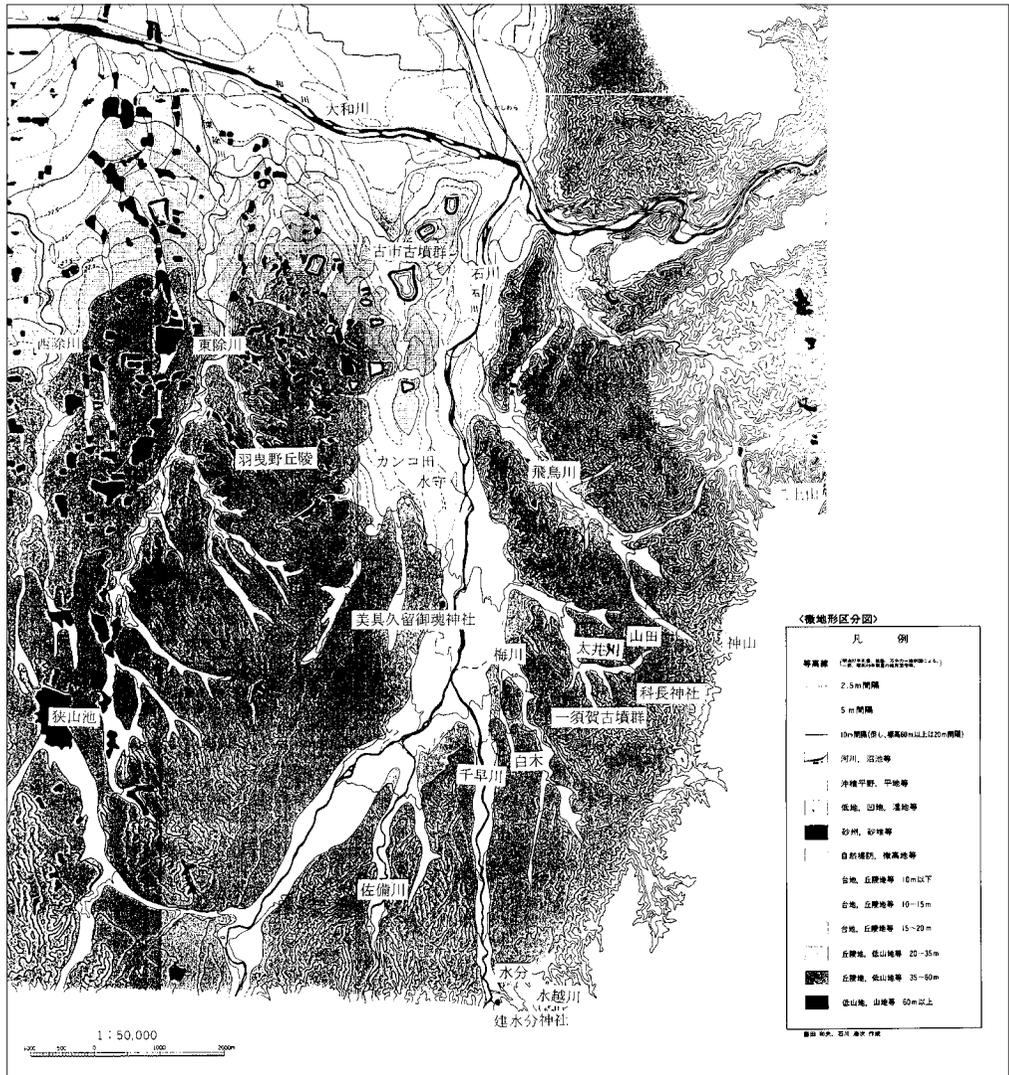


図1 微地形区分図

引用文献：『地盤高図 大阪』1：50,000 国土地理院 平成2年編集

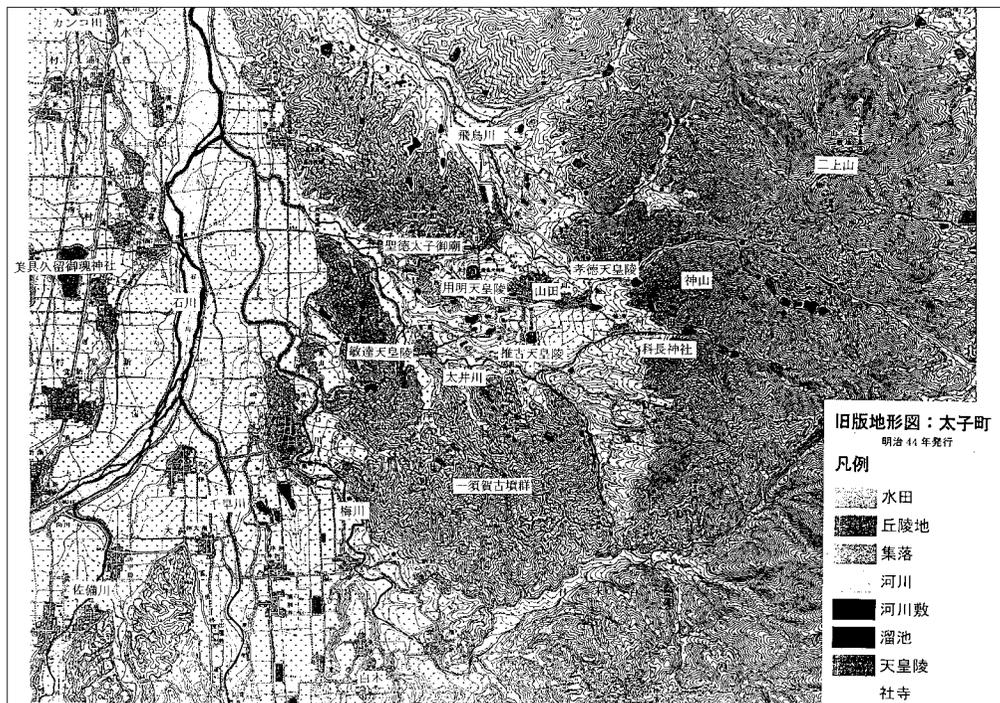


图2 旧版地形图

引用文献：『旧版地図 富田林』1：20,000 大日本帝国陸地測量部 明治44年発行